

大さきんばらに似て、總たひ鳥の風、ズやがたらに同じ、毛色ズやがたらに青味有て、腹薄白し、又腹の白からず、薄赤くきたなきも有、尾兩羽黒し、口背上のかた薄黒く、下背はあひ色なり、ズやがたらをも十姉妹といふと見えたり、巢は春秋なすなり、隨分能子の出來る物にて、世話なく、文鳥のごとく、獨そだてあぐる也、略○中 玉子は十六日にてかへる、巢に付たる日を書付おきて、十二三日前より、きみ粟のもやしを作置、かへる前日あたりより、もはや入おきてよし、夏はもやしも早く出來安し、秋の末頃は出來遅し心得有べし、子はかへりたる日より、廿三四日にて巢を出る物也、春夏も早く出來たる子は、もはや其秋直に子をなす物なり、常も小籠へちいさきふごを釣おくべし、其中にとまる、巢くさはズやがたらにの所にゑるす通り、同じ事にてよし、

〔飼鳥必用〕類違十姉妹

此鳥天明年中に、紅毛人日本渡海の節、本カタラ國に在し内、知る人の方より何鳥とも不知、小サ成雛鳥を送りし故に、其儘長崎に持渡り、漸々と時に掛り、古今無類の麗羽を出したり、尤十姉妹程にて、頭より脊迄、綠青にこんぞやうを引たる色合也、胸より腹は朱のごとし、背は黒ク常の鳥よりも尾羽長く、柳葉尾にて、畫工のさいしきにも不及、色合よく、此鳥薩州江相廻り、夫より江都江廻りたる節、和唐之諸鳥の會有、これを出ス、出會の人々皆々目を驚かし、則其日壹番に付、古今無雙と書いだしたる也、今老の鳥にて、無程相落、其後此鳥見たる事なし、暫も飼とめしならば、巢組に入子を取べきにおしき事也、未此正寫の噂計而已、殘念なりし事也、略○中

十姉妹

此鳥類先年より澤山長崎江相渡、子を取事心安相成、巢組生立方、世の人能クズりし事ながら、あらましは書置也、檀どくと十姉妹の掛合にて出來たるは、檀どくの方へ近くといへども、胸の白黒能クわからず、大目にだんどとは見得候得共、委しく見れば掛合の府合相わかり申候、巢は